

月夜野ホタルの里を支え、毎年観賞会を実施

月夜野ホタルを守る会

みなかみ町



毎年6月から7月にかけて、ホタルの観賞に1万5千人もの人々が訪れる、月夜野ホタルの里。支えているのは、60歳を超えた定年退職後の人たちを中心とするボランティアだ。



カワニナの養殖をしている水槽をのぞき込む子どもたち



熱のこもったホタルポスターコンクールの審査

●活動内容

上越新幹線「上毛高原駅」からほど近い「月夜野ホタルの里」。ホタルの観賞時期には、月夜野ホタルを守る会のメンバーが、約2 Kmの鑑賞コースにロープを張り、足元を照らすソーラーライトを立てる。入り口に受付を設け、うちわと案内資料を配布する。

コースの途中では、今日ほどのあたりでホタルがたくさん見られるかなど案内をする。懐中電灯を持って入場する人には使わないよう注意を促すのも役割の一つ。観賞時期以外にもコースの草刈りといった作業もある。地域の小学校や地域との連携も深い。月夜野地区の3校の小学校では、5月の連休後に、町のカワニナの養殖施設で授業としてホタルやカワニナの勉強会をする。そのサポート役をメンバーが務める。その後、小学校にカワニナを運び、小学生が飼育する。

ホタルの観賞時期には、「ホタル観賞の夕べ」と名付けられた祭り（みなかみ町・みなかみ町商工会が後援）が開催され、メンバーは子どもたちによるホタルみこしをサポートしたり、ホタル飼育体験の発表に聞き入ったりと、世代を超えた交流が行われている。

●事業を始めたきっかけ

昔は家の庭先までホタルが飛んでくるような地域だった。ところが、だんだんとホタルが少なくなってきたと感じた地元の有志メンバー。ホタルを守ることが環境保護にもつながると、昭和58年に会を結成した。

現在250名ほどの登録があり、約140名が実働にあたっている。会員は、支部ごとに新たに定年退職した人に声をかけるなどして増やしてきた。長く活動を続けている人が多く、同じ活動を一緒に行っていることで、地域のつながりも強くなっている。

会員の確保について、みなかみ町観光課自然観光グループの高橋英俊さんは「若いときは、商工会宣伝部などでお祭りをやってもらい、ホタルを守る会は60歳を過ぎてやってもらえばと思っています」と語る。

平成22年にはその長年の活動が認められ、環境大臣賞を受賞。平成25年には30周年記念の祝いの会を開き、長年活動している人々を表彰した。地域の人たちの気持ちが、30年に渡って、今を支えている。



来年もたくさんのホタルが飛ぶようにと、丁寧に草刈り



ホタル鑑賞受付。コンクール最優秀作品のうちわを配布

●工夫している点・特長

毎年、小学5、6年生と中学生が夏休みに描いたホタルのポスターの中から、小学生の部・中学生の部、それぞれの金賞作品がうちわになり、鑑賞会で配られる。審査にあたるホタルを守る会の役員は、広い会場に並べられたポスターを一つひとつ丁寧にしながら、じっくりと受賞作品を決定していく。どの作品も丁寧に描かれており、審査員は選考に悩むほどだ。

実際にボランティア活動をする人は、すべて、社会福祉協議会のボランティア保険に加入しているため、活動の際、ケガなどにも対応ができる。

ボランティア活動となるので、あくまで無償であるが、10月下旬には慰労会が行われる。仲間同士で労う時間は、とても楽しい。日帰り温泉の無料券が提供されることもあり、シニアにはうれしく、かつ思わぬプレゼントだ。今まで他の地区との横のつながりは少なかったが、各地区のボランティアが交流することで、地区同士の住民のつながりを生んでいる。



〈やりがい・楽しみ〉

「ホタル観賞は、リピーターが多く、毎週いらっしゃるお客さまもいます。お客さまに『来てよかった』と言われることを、次の年への励みにしています。温泉地の宿泊客が旅館のマイクロバスでホタルを見に来るなど、町の活性化にも

つながっています。シーズン後の旅館での慰労会も、ピンゴ大会をしたり、違う地区のボランティア同士で交流したりと、皆で盛り上がるのが楽しんでいます」と、高橋英俊さん。

基礎データ

☎0278-25-5031

月夜野ホタルを守る会

事業開始時期／昭和58年

主な活動／

ホタルの生育環境の整備、
観賞会の案内

人数・年齢／

250名 40～80代
(60代以上が多い)

